

[課程-2]

審査の結果の要旨

氏名 木戸 芳史

本研究は、専門職として雇用され、自身の体験を活用してリカバリー志向のサービスを他者に提供するコンシューマー・プロバイダー（CPs）が精神科多職種アウトリーチチームの一員として参加することによって、サービス提供を受けた利用者の入院リスクを下げるができるか、社会機能や行動障害等はどのように変化するか、を明らかにすることを目的としたものであり、下記の結果を得ている。

1. 利用者は with CP 群 108 人、without CPs 群 184 人であり、追跡期間はそれぞれ 405 日及び 397 日であった。Kaplan-Meier 法及びログランク検定では、with CPs 群は without CPs 群と比較して統計学的に有意に入院が少なかった ($p=0.04$)。利用者の個人特性である社会人口学的及び疾病上の特性を調整した Cox 比例ハザードモデル（モデル 2）では、with CPs 群は without CPs 群と比較して入院・入所するリスクを約半分に減少させ（ハザード比 0.53、95%信頼区間 0.31-0.89）、この結果をさらに支援類型別に分析すると治療中断者／未治療者においてのみ統計学的な有意が認められた（ハザード比 0.45、95%信頼区間 0.26-0.87）。一方、支援を担当するチーム特性の影響を考慮したマルチレベル Cox 比例ハザードモデル（モデル 3）では、with CPs 群の入院リスク減少に関して統計学的な有意差が認められなかった。
2. 支援開始から 6 ヶ月後の GAF 及び SBS の変化量については全体として 2 群間に有意差が認められなかったが、事業における支援の類型別に分析すると長期入院後の退院者／入退院を繰り返す者においてのみ with CPs 群の SBS が有意に改善していた。
3. 初回訪問日から 6 ヶ月間においてチーム全体として提供したサービスの内容を 2 群間で比較すると、「ケースマネジメント（間接）」及び「カンファレンス」にかけた時間が全 6 ヶ月間を通じて、「ケースマネジメント（直接）」

「対人関係の維持・構築」は5ヶ月間に渡って、「家族への援助」は4ヶ月間に渡って統計学的に有意に多かった。一方、「身体症状の発症や進行を防ぐ」は、1ヶ月目と6ヶ月目において有意に少なかった。

以上、本論文は、利用者個人の特性を調整した上で CPs が参加したチームからサービスを受けることは利用者の入院リスクを下げる可能性があるということを示し、その一方で、マルチレベル分析によってその結果が有意ではなくなったことから、母体となるチームの特性が結果に大きく影響している可能性があることも示した。本研究は限定的ではあるが、国際的なエビデンス蓄積の一助となったとともに、日本を含むアジア圏においては初めての研究である。精神科多職種アウトリーチの発展に寄与し、地域における治療中断者／未治療者の精神健康に資するものであり、学位の授与に値するものと考えられる。